

ウルシ林の健全育成技術の普及について

二戸農林振興センター林務室では、ウルシ資源の安定確保に向け、今年度、地域経営推進費を活用してウルシ植栽木の獣害対策及び適正な保育管理に関する研修会を開催したので、その概要を紹介します。

1 「ウルシ林の獣害対策研修会」11/8(金)

近年、シカやカモシカ等によるウルシ植栽木の剥皮被害や食害が顕在化してきているため、その対策について関係者間で学習、共有しました。(参加者15名)

(1) シカ、カモシカの生態等(座学)

午前中は、“敵”を知るため、岩手大学農学部の中内准教授を講師に、シカ等の生態や習性、生息数管理等の概要について学びました。

シカの生息密度は今後減少することはないと考えられるため、早い段階での対策が求められます。

(2) 対策資材の設置実習(現地)

午後には(株)小西美術工芸社の福田取締役副社長を講師に、「ザバーン®製樹皮ガード」の設置実習を行いました。

樹皮ガードはジャバラ状にブリーツ加工された厚手の不織布で、数年前から小西美術工芸社が導入し、剥皮被害防止の有効性が認知されていました。

植栽木の太さに応じて裁断した樹皮ガードを、ぐるっと巻いてホチキスで留めるだけ。2人作業が効率的でした。

今回の研修場所は6～7年生の植栽地でしたが、既に剥皮被害が出ており、参加者はより早い段階での対策が重要だと実感した様子でした。

樹皮ガード設置実習



2 「ウルシ林保育管理研修会」11/13(水)

ウルシの適正な萌芽更新を図ることは、資源確保に向け非常に重要です。このため、県の試験林を会場に、ウルシ林所有者や漆掻き職人等を対象として萌芽更新の手法等について研修を行いました。(参加者28名)

(1) 萌芽整理の手法

「日本うるし掻き技術保存会」の工藤竹夫氏と泉山義夫氏の2名を講師に、まずはウルシの旺盛な萌芽をどう間引くか、選木の仕方や芽かきの方法等について学習しました。

萌芽は、樹勢の良いものを中心に一株から3、4本程度になるよう、また、2～4m程度の間隔になるよう仕立てることが理想です。

(2) ウルシの萌芽整理実習

続いて実習。“かぶれ”に及び腰な参加者をよそに、密集する萌芽をチェーンソーで次々と伐り進める講師。舞い上がるウルシの木屑などモノともしません。

もはや“除伐”の感もありましたが、参加者も徐々に慣れ、終盤には皆楽しみながら汗を流しました。

萌芽の樹勢や向き、将来の掻き手の作業等をイメージしながら間隔を確保していくため、度胸とセンスが問われるものと感じました。

萌芽整理実習の様子



3 今後に向けて

当室では、ウルシ資源の安定確保に向け、「掻く、伐る、(萌芽を)出す、育てる」のサイクルが上手く回るよう、今後も、ウルシ林の健全育成に必要な技術や情報の普及、啓発等に取り組んでいきます。